

## 令和3年度 第1回下野市総合教育会議議事録

- 1 日 時 令和4年2月18日（金）午後4時00分～午後5時10分  
2 場 所 下野市役所 3階 303会議室  
3 出 席 者 下野市長 広瀬寿雄

### （下野市教育委員会）

教 育 長	石 崎 雅 也
委 員	永 山 伸 一
委 員	熊 田 裕 子
委 員	石 嶋 和 夫
委 員	佐 間 田 香

### （事務局関係）

総 務 部 長	手 塚 均
総務人事課長	倉 井 和 行
総務人事課課長補佐	平 野 享
教 育 次 長	近 藤 善 昭
教育総務課長	上 野 和 芳
学校教育課長	田 澤 孝 一
教育総務課課長補佐	神 田 晃
学校教育課課長補佐	稲 葉 亜 希 恵

4 傍 聴 人 0名

5 議 事

- （1）南河内小中学校の開校に向けて
- （2）学校適正配置について
- （3）その他

- (神田教育総務課課長補佐) ただいまから、令和3年度第1回下野市総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、広瀬市長からご挨拶をお願いいたします。
- (広瀬市長) 市長から挨拶
- (神田教育総務課課長補佐) ここで、市長部局の事務局職員から自己紹介をします。  
以下、総務部長及び総務人事課職員の自己紹介を行う。
- (神田教育総務課課長補佐) それでは議事に入ります。総合教育会議では広瀬市長が議長となり、議事進行を行うことになっておりますので、広瀬市長の進行でよろしくをお願いいたします。
- (広瀬市長) それでは、進行を務めますのでよろしくお願いいたします。早速ですが議事に入ります。  
議事(1)南河内小中学校の開校に向けて、事務局からの説明をお願いします。
- (田澤学校教育課長) 南河内小中学校開校に向け、これまでの検討状況等も含め報告する。資料に基づき説明。
- (稲葉学校教育課長補佐) 南河内小中学校に関する資料として、学校ごとに毎年度作成している「学校概要」、新しい学校の設立に向けて特色ある教育活動がどのように行われているか具体的に示した「下野市立南河内小中学校の教育」について説明。
- (広瀬市長) ただいま事務局より南河内小中学校開校までの説明がありました。皆様方からのご意見をいただきたいと思っております。
- (永山委員) 平成28年から大変長い時間をかけ、しかも多くの方々の力添えを受けてここまでこぎ着けたと思う。先日の内覧会において、教育委員全員で、素晴らしい新校舎を見てきた。中でもメディアセンターのデザインと開放感に感心した。それと給食室。食品工場かなと思うぐらい立派で、エアシャワーから紫外線の衣類殺菌設備まで設置されていた。  
大変素晴らしい施設であったが、これは言ってみれば、新車の納入のようなものであると思った。素晴らしい車が来て、今回提示された「学校概要」は車の仕様書のようなもので、どんな素晴らしい性能を備えているか、どんなポテンシャルがあるかというようなことを伝えている。私たちは実物も見て、今の説明でもそれが分かったわけだが、問題はこれに、誰を乗せてどこに行くか、そして何をするか、どこに運転していくか、どんな運転をしていくかという部分だと思う。  
資料「下野市立南河内小中学校の教育」において、このような教育をやっていく、という内容が書かれているが、これは、まだ運転しだす前、あくまでもこんな可能性があるかもしれないというような部分になる。正にこれから実際に子どもたちが通うようになり、そこに職員が全員そろって、それで自分たちで「これからどんな教育をしていくのか」について考えていくものだと思っている。そし

て是非、これから南河内小中学校に集まってくる子どもたち、職員の方々に「施設一体型の小中一貫教育は、ここがほかとは違うんだよ」ということを考えていただき、それを見せていただきたいと思っている。なるほど9年間の学びを通してこういうことができたのかと。

また、自然と「こういうことができた」と考えるのではなく、何かプランを立ててほしいと思う。学習指導要領に書いてあることをただこなすのは、別に小中一貫でなくてもできる。そこに書いていないような新しいアイデアを是非取り入れていただきたいと思う。

「下野市立南河内小中学校の教育」の中に出ているような「1年生から英語教育を9年間通して実施する」というのも一つのアイデアだと思う。そのほかにもアイデアはたくさん出てくると思う。そういったものを実際に運転しながら、自ら枠組を固めてしまうことなく、自由な発想で大胆に計画していただければと思う。そんな夢を持っている。

(石嶋委員)

「学校概要」の児童生徒数・学級数が、各学年3クラスで——9年生だけ2クラスだが——特別支援学級もそれぞれそれなりの数があって、全校生徒が763人ということで、規模的にはちょうどいいと思う。あまり小規模だと部活動の数が足りなかったり、子どもたちの人数が減ったりしてなかなか難しいところがある。子どもたちの人数が少ないということは、先生の数も少なくなるということなので、いろいろと対応が難しくなる。逆に多すぎるとまとまりづらくなったりするので、本当にちょうど良い規模で、さらに市長の配慮により学校生活支援員なども置いていただけるので、永山委員がおっしゃったように、教育活動を行いながら最初の計画を立てて、更に行いながらできること、改善すべきことを見つけていって、何年かかけて、南河内小中学校ならではの特色ある活動ができるように進めていただければと思う。すぐやろうとしても難しいと思うので、時間をかけて、みんなで話し合いながら進めてほしい。ちょうどよい規模と、あれだけの素晴らしい施設があるので、どんどんアイデアは出ると思う。期待している。

(熊田委員)

長い道のりからとうとう結実したなと思っている。自分の中で注目しているのは「下野市立南河内小中学校の教育」の最後のページにある異年齢交流によって、中1ギャップも防止しつつ、6年生のリーダーシップを発揮できる場面もかなりつくっているところや、4年生からもリーダーシップを発揮できるところ、それぞれ4年生以上の学年がいろいろな場面でリーダーになれるところが良いと思っている。他にも、例えば1年生をお世話するという場面は、中学生にとってもいい影響を与えるのではないかと期待している。また、先生は67名配置されると聞いた。最初は戸惑うこともあるかもしれないが、小学校と中学校の先生がうまく協力しあっていくと

良いと考える。やはりマンパワーはすごく強いと思うので、67名一人一人が足し算ではなく掛け算で協力し合って、より良い教育、それから働きやすい職場というのを作っていくことを、非常に期待している。

(佐間田委員) 私は去年から教育委員になったので、この沿革を見て、本当に、皆様の力によってここまで来られてよかったと感じた。あとは、南河内小中学校では、コミュニケーション能力を育てる教育活動がメインになっているということで、また異年齢交流であるとか、少子化の時代、SNSが発達している時代に生きていくために必要な力を育てていく活動を行って、これから生きていく子どもたちが、それを是非身に着けて卒業できるといいなと思った。

今、私は各小学校で2年生の「いのちの授業」を行っているが、薬師寺小、吉田西小、吉田東小ともにアットホームな学校で、どの学校も保護者がすごく係わりを持ってくれる学校だなという印象を受けている。その学校が一つにまとまることで、地域の人たちと共に学校をつくっていったらいいなと思う。仁良川地区の新しい世帯の方がたくさんいるので、学校が地域の住民をつなげる場になればいいかなと思った。そこに期待したいと思う。

(石崎教育長) まず、国、そして下野市が進める小中一貫教育の更なる充実が見込まれる。南河内小中学校のみならず、下野市の小中一貫教育の強力な推進力になってくれるものと期待している。

2点目に石嶋委員も述べていたが、全国的に、規模や施設等に関することで、義務教育学校の開設にかなり苦心している市町が多い。その中であって、適正規模、施設が充実した学校が開校できたと考えている。

3点目は、先ほど提示された「南河内小中学校設立経過」の中には含まれてはいなかったものの、経過として様々な閉校行事がきめ細やかに実施されたのも大きなことと思われる。それによって児童生徒は心情面のけじめが付き、新しい学校への期待や意欲を深めることができたように考える。

4点目として、恐らく最初は住民対応等に苦労することが多かったと思うが、地域住民並びに保護者への説明を丁寧に繰り返したことにより、12月の説明会では質問や意見はほとんど出ない状況であった。地域や保護者の期待も高まっているように感じた。

最後に、下野市は栃木県内で人口増加率が一番高く、その中でも増加率が特に高い仁良川地区だが、転居してきた方々に理由を聞くと、「南河内小中学校が開校するから」と答えた方がいた。開校は地域活性化の一因になると思われる。それだけに、地域と共にある学校づくり並びに学校を軸とした地域づくりに努めるよう学校に期待したいと考えている。

(広瀬市長) 下野市というところは、合併をしたときに、12小学校区、4中

学校区という形になって、自治体の規模からすると小学校が非常に多い地域であった。だからといって統廃合する云々という話ではないのだが。先ほど佐間田委員から、現在、地域が一生懸命協力してくれている学校が多いため、南河内小中学校も地域と一緒にしてくれる……という話もあった。学校というのは地域の核になるものであり、学校中心の動きをしていくところが非常に大きい。我々としては、中学校がある程度大きな形で地域を代表していきながら、小学校は様々な個別案件を聞き取りやすい場所、それぞれの要望が出てくるような場所という捉え方をしている。そのような思いの中で、市長部局は様々な地域要件の中で動いている規模体というのが小学校区、中学校区であると捉え、動いていた。その中でこれだけ学校があると、合併して年を追うごとに当然学校のレベル差が少々開きすぎるように思う。平均値に収めようという思いではないが、レベルが高い方にどんどん移行していってくれるような学校になってくれればありがたいなという思いが生まれたというのが正直なところである。

またそれと同時に、小規模の学校だと団体活動ができない場合がある。特に気になったのは運動会についてである。私は運動会には出ないと合併時に宣言した。これは教育長トップで動くものだと。それであっても、運動会の様子というのはいろいろなところから聞こえてくる。特に小規模学校の場合は、地域の方々が運動会に参加しないと運動会自体が成り立たないというようなことも耳に入ってきた。これはこれでいいのだが、ある意味、中規模大規模の学校とは少々違うなと思っていたところである。そういった中で、当時の教育長といろいろな話をしながら、学校を一体化することにおいて、子どもたちの伸び方についても考えなければならないが、教員の責任の所在というのも組織の中で出てくる、という話をいただいた。小学校のときに取りこぼしをしたものが、中学校でもずっとそのままであったときには、小学校の先生の責任をどのように考えるのか、また中学校の先生がどうやってそこをフォローアップするのか、そういったものを考える。ただ、今の状態のままですと、1年1年で追いかけるような状況になるのもちょっと残念という話も聞いた。そんな中で、先生方同士でコミュニケーションを取りながら、一人一人の子どもを義務教育の間、継続して見られるような仕組みをつくるためには、難しいと言われているかもしれないが、やはり義務教育学校という学校の在り方が一番だと。その思いの中で一生懸命そこに進んでいこう、そして市内全小中一貫教育としてやっていこうと。その中で当然ながら、物理的に一体でできる所と、歴史的に隣接をしている所と、完全分離になるところとが出てくる。一体の学校をつくることにおいては、南河内中学校区は小学校が全て小規模校で――薬師寺小学校は違った状況だ

が——、その中の意見においてここでやってみようということ盛  
り上がり、いろいろな体系づくりの中で頑張っ  
て動き出して、ようやくここまで来たと思  
う。

永山委員の述べたとおり、新たな施設が完成し、教育の指針もでき、これからが本番である。この学校がどのように子どもたちをつくっていくのか、地域をつくっていくのか、そして教員をつくっていくのかというところを考えてほしい。中でも、教員をつくっていった、という話が出るのが一番望ましいのかなと思っている。「下野市はやったな」というところまで行くためにも、まずは子どもたちを育てながら、そして学校行事等で地域とうまく絡みながら、そこで小学校の先生、中学校の先生が一体となって動き出したらというような夢を見ている。「やっぱり下野市で良かった」という声が出てくる学校に早くなしてほしい。

ただ一点懸念がある。よく中1ギャップという話があるが、逆に考えると、小学校生活が苦しいと感じた子どもは、中学校進学で一度環境が変わるため、リスタートができるという部分があった。それがずっと同じ学校で、となると、一度苦しい思いをした子どもたちにとっては、非常につらい学校生活になってしまう。そうならないために、周りにいる大人が十分注意しながら子どもたちを見ていかなければならない。それと同時に、上級生が一生懸命下級生の面倒を見てくれるのだろうと純粋に期待したい。

(石嶋委員)

市長がおっしゃっていた、子どもをつくり先生をつくるということについてである。ある程度の教職員数、しかも若手中堅ベテランが揃わないとそれは難しい。人事なので難しいと思うが、若手とベテランだとなかなかつながらない。若手と中堅だけだと、若手が使い走りにされて終わる可能性もある。年齢構成や男女比などうまくバランスがとれれば、教職員をつくるというところまで進められるのではないかと思う。規模と環境が整ったので、あとは本当に先生方が、どんどんベテランを支え、若手を引っ張るという意識を持っていけるかが重要である。しかも小学校、中学校の大きな壁があるかと思うので、それを乗り越えるためにも、子どものコミュニケーション能力よりもまずは先生のコミュニケーション能力を高めるというのが重要と思う。

(広瀬市長)

小学校の先生は担任を持つため、教室に居ることが多く、子どもたちを日頃から見ている状況である。しかし、中学校の先生は教科担任制であるため、担当の教科が終わると次の授業のため別クラスに移動する。いつも思うのが、学校の先生は孤独だろうなど。大半の時間は子どもたちと一緒に過ごすため、一人きりというわけではないのだが、大人社会で考えると孤独だろうなど。そのような中で、全て自分で問題を解決しなくてはならないということを考えると、大変だろうなどと思う。そのときに中学校の先生から何かアドバイス

はあるのか。今はベテラン中堅若手という話だったが、今度は小学校中学校で時間の組み方が違うと思うが、その辺りはどのようになるのか。

(石崎教育長)

中学校と小学校の違う点、確かに小学校の先生のほうが孤独だと思う。やはり学級担任制ということもあり、市長の述べたとおり、1つの教室にとどまることも多い。よく言われるのが、小学校は児童生徒指導については中学校に学ぶべきであるということである。というのも、中学校は先生同士のコミュニケーションがかなり取れていて、担任、学年主任、部活動顧問が協力し、組織で生徒を指導するのである。小学校はどうしても学級担任制なので、学年主任が係わることもあるが、原則学級担任が指導する。そういうこともあって、児童と密な関係は出来るが、横の関係、ほかの先生との関係は少し弱い。どうしても、教員が教員を指導したり、教えたり、教員同士と一緒に児童指導を進めたりといったものは、正直小学校のほうが弱いと思われる。ただ義務教育学校ではそういった点を解消することができる。原則前期課程は前期課程、後期課程は後期課程で動きながらも、やはり前期課程の良いところを——小学校の良い点は子どもたち一人一人を丁寧に見ているところである。見ている時間が多いのでいろんな指導ができる。例えば、あの子は体育が苦手だけど国語は得意であるとか。中学校だと国語の先生がするのは国語の評価のみ。細かな見取りができるのは小学校の良い点である。話を戻すと、そのように前期課程の良いところを、教科指導を通して後期課程の先生も見習う。逆に後期課程の良い点は、先ほど述べた「子どもの指導は集団で行う」というところである。それを前期課程の先生も勉強できる。

こういった点で、同じ敷地内、同じ建物の中に、小学校と中学校が前期課程と後期課程となり入っていることによって、大きな働きができるのではないかと思う。

(広瀬市長)

校長一人と聞いたときに大変だなと感じたが、その中でうまくやっていってほしい。きっと動き出してから「あれはどうなの」「これはどうなの」というような疑問がたくさん出てくると思うので、それらに対して上手い形で動いてくれればと思っている。

(永山委員)

施設一体型の小中一貫教育ということで、施設も新たになり、一度リセットされるので、是非最初から、地域の方々の力を使うような学校になっていただきたいと思う。今、教職員数の少なさというのは、なかなか一朝一夕では改善できない状況にある。今一番足りないのは、子どもたちの後ろで見ていてくれる大人ではないのかと思う。ICTを使った授業にしても、GIGAスクール構想によって、ハード面は前のめり気味に入ってきている。しかしそれを使いこなさなければいけない。そのときに、「こういうものがあるから使うんだよ」と言うだけでは、恐らく子どもたちは使わない。ごく

一部の能力のある子どもがどんどん活用して伸びていくことはあるかもしれないが、大多数の子どもたちは、誰か大人のサポートがないと使えないと思われる。本来は一番使わなくてはいけない、例えば学び直しなどをする子どもたちが使えないというのは困る。しかし、ただでさえ忙しい学校の先生に、後ろに付いていて一緒に見てあげてください、とお願いするのはなかなか難しいと思う。そのため、これは是非一旦リセットされたということで、地域の方々の学習ボランティアや、子どもの後ろで見ていてあげる大人が学校に入ってこられるような、そういう空気を最初につくっていただきたい。地域の方に聞くと、なかなか学校は敷居が高いという。いろいろ手伝ってあげようと思っても入っていくのが難しいというような声も聞くので、学校運営協議会なども使って、大人が子どもの後ろから見ていてあげると。もちろん人選は難しくなる。しかし、子どもたちと近い距離にいるボランティアになるので、十分な厳選をしていただきたいと思う。そういう大人たちが入って来やすい学校ということで進めていただければという希望を持つ。

(石崎教育長) そのことに関してもやはり義務教育学校がよろしいかと思う。敷居が高いと永山委員は述べたが、実は、小学校は敷居が低く中学校は高い。去年国分寺中に居て、いろいろ地域ボランティアに入ってもらったが、これは国分寺小が隣にあるからこそであった。実際に小学校にもボランティアで来ているから、中学校にも来る、という形になっていた。ましてや義務教育学校であれば、同じ敷地にあるため、小学校から入ってきたボランティアの方を引っ張って、中学校に来てもらうという形をつくれると思う。

(広瀬市長) 次に進めたいと思う。

続いて、議事(2)学校適正配置について、事務局から説明をお願いします。

(上野教育総務課長) 平成25年11月策定の下野市学校適正配置基本計画に基づき、細谷小学校の小規模特認校における取組の検証と適正規模について、並びに国分寺小学校と国分寺中学校の施設環境づくりの検討について説明。

(広瀬市長) 学校適正配置について、いかがでしょうか。

(石崎教育長) 細谷小学校については、来年度の検証を待ちたいと思うが、そのことについて、現在石橋小学校の学童保育室を利用している細谷小学校に在籍する児童の保護者の方が「石橋小の学童へ行くことが、中学校入学後の子どもたちの人間関係構築に大変役立っている」ということを話していた。細谷小学校には学童保育室がないので、児童が石橋小学校に行くのは遠くて大変だなと思っていたが、人間関係があらかじめ構築されるため、中学校入学時の不安はなくなった、という話を伺ったので、そういった面も含めて考えていただきたいと思う。



資料には、国分寺地区についても載っていた。難しいことはあるかと思うが、国分寺中学校に勤めていた者からすると、国分寺地区の小学校間の異質感は少ないと思う。国分寺小から来た生徒はこういう生徒、国分寺東小から来た生徒はこういう生徒……という感じはない。今後どういう形になっていくか分からないが、そういった国分寺地区としてのまとまりは、今後学校の適正規模等を考える場合には考慮に入れていくべきだと思う。

(永山委員)

国分寺西小学校のときに感じたのだが、一般に「地域の方々の気持ち」と一言で表そうとしても、子どもがいる家庭と、そうでない家庭の考え方には大きな開きがあり、高齢の方の考え方と、これから自分の子どもが学齢に達するような方との考え方も全く違う。単に「地域」という言葉では表せないような複雑な問題があるのだなと感じた。それはやはり、地域が変わっても同じであると思う。私たちが第一に考えなくてはならないのは、各家庭が、自分の子どもを学ばせるときに不安を持つような学校ではいけない、ということである。まずは子どもたちのため、それと同時に、当然、子どもたちをきちんと育てたいと思っている保護者のためということで、まずはそちらの考えを一番中心に考えていかななくてはならないのかなと思う。

(熊田委員)

細谷小学校に関してよく知っている方に話を聞いたとき、他地区の方々が来てくれていい面もあるが、例えば、協力的な細谷小の地域の保護者と比べて、他の地区の方は——遠くに住んでいるから仕方がなく、人にもよるのだが——、協力してくれる保護者が少ない、というような困りごともあると聞いた。

人数の関係もあると思うが、子どもが小学校に在籍時、同級生が細谷小学校に通うことになり、中学校で再会したとき、リーダーシップを発揮するお子さんになっていて、小学校の教育が良かったんだなと感じた。小規模特認校の良い面はあるが、その制度によって児童がどんどん増えるかということ、限界もあり、結論はなかなか難しいと思う。様々な検証をした上でどういう方向に進んでいくのか——やはり小学校がなくなるのは地域の方々にとってもつらいことであるので、一緒に考えていくしかないのかなと思う。

(石嶋委員)

小規模校は児童によく目が届く点など、利点も多いと思うが、子どもたち同士の間関係がギクシャクした場合の居場所の問題や、クラス替えができないという点はかなり大きいだろうと思う。そういったことをどう解決するかが課題である。中学校でも、私が勤務した中学校は学年2クラスしかなく、2クラスあるのだけど3クラス欲しいなと思ったほど、人間関係が複雑になったときもあった。クラスを分ければ解決するというわけではないが、一緒にいること自体が辛いという子にとってはそれがせめてもの救いになる。ましてそれが1クラスしかないとなると、どういうふうにもその子たち

の心を補うのか。説得で何とかなる部分ではないと思うので、やはり単学級は難しいといつも思っている。

(佐間田委員)

細谷小学校に関しては一長一短、いいところと、石嶋委員がおっしゃったような苦しいところがあるかなと思う。今年度伺ったときに2年生に女の子が一人しかおらず、少しかわいそうかなと思った。

国分寺小学校に関しては、移動するのではないかという話を一時耳にしたが、同じところにあってほしいなというのが正直な気持ちである。

(広瀬市長)

下野市は合併時、12小学校あった。下野市はこれくらいの予算規模ですよという基準財政需要額の中でいくと、小学校はだいたい7校程度、約半分ぐらいというのが適正規模である。しかし「下野市には予算から考えた適正規模を理由に学校を閉校するのか」と思われてしまうのは困る。そこは気を付けなければならない。そうではなく、小さな学校もいいところはあって、小さな学校でしか経験できないことはどうするのかという話になる。

小学校というのはその地域のコミュニティの核になると考える。そこをどういうふうにと丁寧に触っていくかということを考えながら国分寺西小学校については取り組んでいった。

細谷小学校については、地区外から来る方々も多いということもあると、地域内の子どもよりも、地区外の子どもが多くなったときに、学校の在り方自体が変わってしまうかもしれない、という怖さを私は持っている。そういった形が必要な学校だということ捉えればいいのかもわからないが、地域からしてみれば、細谷小学校というのは昔からの地域の学校なのだ。「それなのにいつの間にか知らない人の方が多くなったね」という言葉が、地域の方から出るのが怖い。そうならないように子どもたちと地域が密に、うまくやっていってくればありがたいなという思いがある。そのため、学校訂正配置については教育委員会において深く議論を重ねていただいて、ご意見をいただければと思っている。

それと国分寺小学校、国分寺中学校の件についても、議会がよく質問が出てくる状態となっている。南河内小中学校の姿を見れば当然こういう話は出てくると思う。国分寺小中学校の話が出てくれば、将来石橋はどうするのかという話もやはり出てくると思う。その中でまず南河内小中学校を開校して、動き出したら今度は私の地区、という話になると思うので、市長部局としては、それではその方向で進めていこう、という話にもなってくるのかなと思う。細谷小学校の学校適正配置の部分とどのタイミングになるか分からないが、国分寺小中学校の件についても、できれば教育委員会の中において議論を重ねていただいて、市長、又は所管課にご提言いただければと思っている。そういった方向で会議を進めていただければと。また大変な思いを教育委員会にお願いいたします。

続いて、議事（3）その他について、事務局からありますか。（特になし）

委員の皆様から何かありましたらお願いします。（特になし）

それでは以上で議事を終了させていただきます。活発なご意見ありがとうございました。

（神田教育総務課課長補佐）

以上で会議を閉会といたします。